

# 早生れ児と遅生れ児の発達

松 原 達 哉



## (一) はじめに

早生れと遅生れの問題は、幼稚園教育、学校教育において古くから重視されてきているが、この分野の心理学的研究は、あまりない。それだけ研究方法が困難であり、多くの問題点を含んでいるのである。

現在の制度では、六才になると、幼児は小学校に入学するが、実際には、四月生れ（六才十一か月）のものから翌年の三月生れ（六才〇か月）のものまで、同一学年に入学することになる。極端に言えば、約一年間の差異のあるものが、同一学年で同一に学習することになる。この一年間の差異は、身体的成熟も知的・情緒的・社会的成熟でもかなり違って、早生れの子ども（Younger Children）は、

遅生れの子ども（Older Children）に比較して不利ではないかと考えられる。とくに、幼稚園および小学校低学年の時期のこの差異は、成人のそれと比較して、子どもの心身の発達に与える影響も大きいと考えられる。

そこで、筆者は、早生れ児と遅生れ児の比較研究の一つとして学力、体位、欠席日数、指導性などの面から、学年を追って縦断的に比較検討することを目的とした。

## (二) 研究の方法

研究の対象として、早生れ群（昭和二四～二六年の二、三月生れ）と中間児群（昭和二四～二六年の九、一〇月生れ）と遅生れ群（昭和二三～二五年の四、五月生れ）の三群とした。これらの三群

第1表 被験者数

群 別	生 れ 月	小 学 校			中 学 校		
		男	女	計	男	女	計
早生れ群 (Younger Children)	2. 3 月 (4月1日を含む)	78	81	159	101	76	177
中間児群 (Middle Children)	9. 10 月	76	80	156	103	75	178
遅生れ群 (Older Children)	4. 5 月	79	61	140	82	63	145

の条件をできるだけだけ統一するため、被験者は、知能が普通であつて、両親が健在で、小学六年生あるいは中学三年生まで、就学延期、重病、大事故、長期欠席、転校など身辺に特別異常がなく、六年間

あるいは九年間、同じような学校経験をもつた児童・生徒だけを調査対象とした。

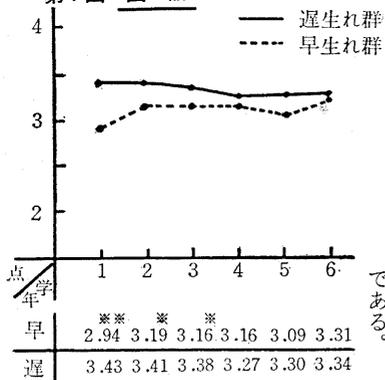
(1) 被験者 東京、岩手、秋田、岐阜、三重、新潟県下の一七小  
学校の一八三〇人の児童の中から、前記の条件に適する被験者を選  
択し同一被験者を六年間縦断的に比較研究した。なお、体位につい  
ては、さらに三年間比較研究するために上記の条件に適する被験者  
を別個に選択し、三年間縦断的に検討した。(第1表)

(2) 調査項目

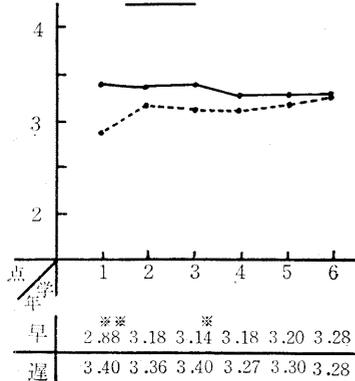
(a) 学力……国語、社会、算数、理科、音楽、図工、保健体育の七  
教科の学年末の学業成績を五段階に評価されたものである。

(b) 体位……身長、体重、胸囲、座高を毎年四月に測定されたもの  
である。

第1図 国語

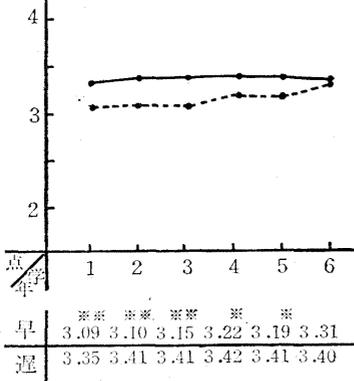


第2図 社会

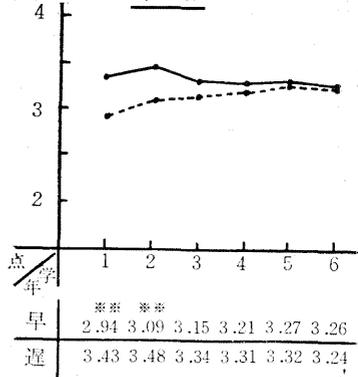


(c) 欠席日数……各学年の一年間の欠席総日数。ただし、忌引きとか水害・流感・地震などによって一斉休暇した日数は除外した。

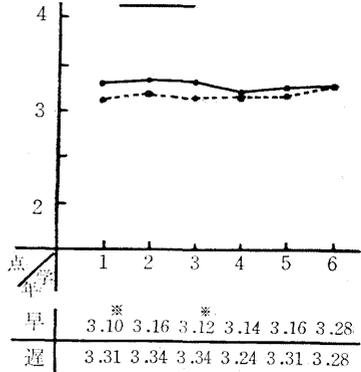
第6図 図工



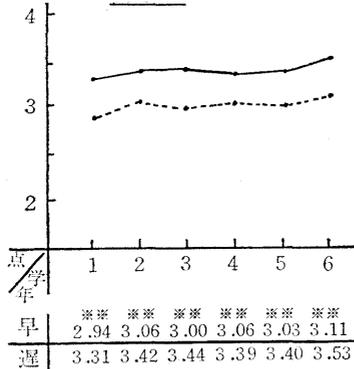
第3図 算数



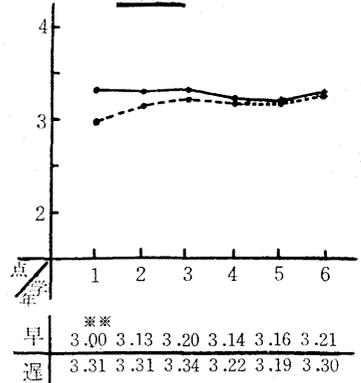
第4図 理科



第7図 体育



第5図 音楽



(d) 指導性……各学年における学級委員およびクラブ活動などの委員の経験の有無。

### (三) 研究の結果

(1) 学力 第1〜7図に一年から六年までの早生れ群と遅生れ群の学業成績の結果を图示したが、国語、社会、算数、理科などの知的教科は、平均して二〜三年間は、遅生れ群の方が、早生れ群に比較して優れているが、三〜四年生ごろから差がなくなって、両群の学力が接近している。技能教科では、音楽を除いて、両群の差異が著しく、保健体育などは、六年間その差異が顕著である。中間児は、ほぼ両群の間であつて接近勾配も類似している。

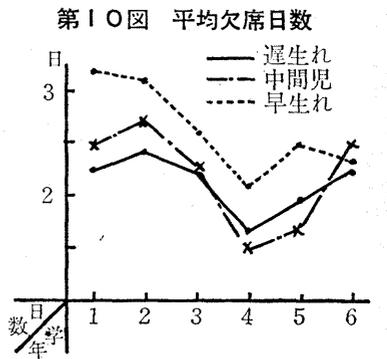
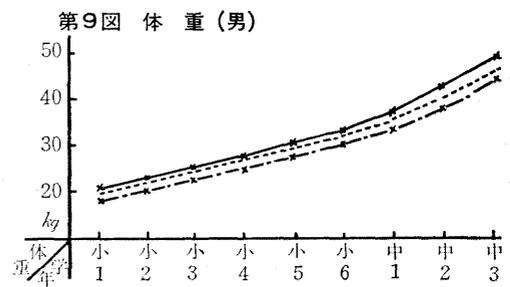
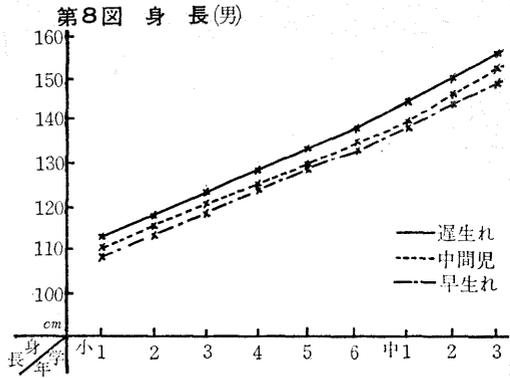
(2) 体位 体位は、男女差が著しいので、統計処理は、男女別に行なつた。男子の場合、身長、体重(第8〜9図)、胸囲、座高ともに、遅生れ群は早生れ群に比較して、小学一年生から中学三年生まで優れている。その差異は、小学校低学年においては、ほぼ一学年違う。女子の場合も、男子の場合と類似した傾向があるが、身長、座高などは、中学三年生で差がなくなっている。なお、男女とも中間児群は、各学年とも早生れ群と遅生れ群のほぼ中位を占めて発達している。

このような体位差があれば、体力を必要とするような教科学習や行動には、かなりの影響があるものと考えられる。第7図で保健体育の学業成績が六年間遅生れ群が早生れ群に比較して優れていたことを示したが、こうした身体的成熟差が影響しているものと考えら

れよう。さらに、幼稚園や小学校低学年における体位差は、幼児や児童の体育の授業をうける態度にも影響しよう。発達の性に体育の好嫌が顕著になってくるのは、小学三年生ころからであるといわれるのも、一つにはこうした体位差からくる体力差を、この年代で児童が意識してくるからであろう。

(3) 欠席日数 早生れ児は遅生れ児に比較して、心身が未成熟であるため、就学後学校生活に不適應を起すものが多く、欠席日数も多いのではないかと考えた。アメリカのI・B・キングが第六、七年生で、両群の出席日数を比較しているが、年長組の遅生れ群の方が、平均出席日数にして、十七、六日多いことを報告している。本研究結果は、第10図のようであり、一〜二年はやはり、早生れ群より遅生れ群の方が、一年間の平均欠席日数は少ない。しかし、三年以上になると若干差異が少なくなり、六年生ではほとんど差がない。しかし、欠席の理由には、疲労しやすい、感情的な理由からの登校拒否、病気など種々ある。忌引きとか、水害・流感、地震などによる一斉休暇は除外したが、報告された欠席日数をそのまま、生れ月による成熟差と結びつけて比較することは問題であり、ここでは参考程度に報告しておく。

(4) 指導性 指導性の尺度として、学級委員およびクラブ活動の委員の人数を調べた。四年生までは、身体的に成長し、精神的にも発達している遅生れ群の中から委員になっているものが多い。しか



早	3.21	3.15	2.69	2.12	2.52	2.36
中	2.50	2.75	2.27	1.50	1.66	2.50
遅	2.29	2.48	2.26	1.66	1.95	2.26

し、五年生からはその差異がなくなっている。つまり、低学年では、体の大きい、腕力のある子がリーダーになりがちで、高学年になると、外形的な条件でなくて、責任感、信頼性、親切などの人格的徳性や知能、学力などの優れたリーダーとしての本質的特性をそなえたものが、委員になる傾向がある。だが、この委員の選出方法には問題があり、これと早生れとの関係もさらに検討してみないと明確なことはいえない。

以上が調査結果の主な内容であるが、つぎに、某大学付属小学校

に在籍している児童の生れ月を参考までに報告する。

某大学付属小学生の生れ月別人数

この小学校は、毎年競争率が激しい入学困難な学校である。この学校の小学二年生から六年生までの八二三名の児童の生れ月別人数を調べた結果は、第二表のようである。

遅生れの四月から六月までに生れた人数は、二四五人で、早生れの三月から一月までに生れた一三〇人に比較すると約二倍である。

この学校の入学の選抜方針がどのようであるか不明であるし、また生れ月別志願者数もはつきりしないので、これだけの資料から遅生れが有利であるとはいえない。しかし、在学児童の絶対数は、遅生れの方が多いということは事実である。

第2表 某大学付属小学生の  
生れ月別人数

生れ月	入学時の 生活年齢	人 数			
		男	女	計	合 計
3月	6歳0か月	21	23	44	} 130人
2月	6歳1か月	18	22	40	
1月	6歳2か月	18	28	46	
12月	6歳3か月	29	27	56	} 171人
11月	6歳4か月	23	30	53	
10月	6歳5か月	33	29	62	
9月	6歳6か月	35	34	69	} 247人
8月	6歳7か月	47	37	84	
7月	6歳8か月	58	36	94	
6月	6歳9か月	35	51	86	} 275人
5月	6歳10か月	41	44	85	
4月	6歳11か月	66	38	104	
計				823	

(四) 残された問題

(1) 学力を比較する場合、両群の指導方法を一定にし、標準学力検査を実施し、マッチング・メソッドによって検討すること。

(2) 学級編成を、早生れ群・中間児群・遅生れ群にわけて、学習指導を継続的に実施する実験群と、そうでない、生れ月を考慮しないで学級編成をする比較群とにわけて、両者の発達(学力・体力・社会性・その他)がどのように違うかを研究すること。

(3) 体位の測定は、中学三年生においても両群に有意差があるか

ら、さらに資料を増すとともに年齢を高くまで継続研究すること。  
(4) 体力測定として、五十米疾走、立巾跳び、相撲、スボンジボール投げ、けんすい、垂直跳びなどさせて、各科の平均を継続的に比較すること。

(5) 体育の授業に対する態度測定を發達的に行ない、身体的成熟差が、体育の好嫌にどのように影響するかを調べること。(目下研究中)

(6) 欠席の日数については、健康診断表などを用い、欠席の理由を明記するとともに、集計人数を多くすること。

(7) 早生れ児・遅生れ児を各数名選び、上記にのべた以外の項目(飽き・忍耐力・成長速度・その他)について詳細に調査研究すること。(事例研究)

(8) 社会性の測定としては、ソシオメトリとかドルの Social Maturity Scale などによって、客観的に測定すること。

(9) 行動・性格については、学習指導要録で定められた「性格・行動の記録」を学習簿に基づいて比較したが、指導性、根気強さ、情緒の安定、責任感、自主性などは遅生れの方が六年間やや優れ、協調性、活発、明朗性、おちつき、神経質などは、一年生から差がなかった。これらについても、客観的に測定する方法を工夫し、比較研究する必要がある。

以上、残された問題を列挙したが、いずれにせよ種々の点で、

早生れ児は、小さい時不利であるとするならば、実際の指導の場合には、特別の配慮が必要である。

##### (五) 幼稚園保育における問題

本研究は、主として小学生を中心とした早生れと遅生れの研究であるが、小学校においても低学年において、両群に心身の発達に差異が見られる。だから、それ以前の幼児においては、さらに差異が顕著である。この幼児期における心身の劣位が、その後の児童・生徒の性格形成に影響するところも大であろう。早生れ児は、劣等感を形成しやすいのではなからうか。一度うえつけられた劣等感は回復がしにくい。この点、幼稚園における保育指導は、十分配慮しなければならぬ。

幼稚園でクラス編成する場合、幼児の身体発育、知のおよび情緒的・社会的発達を含めた就園レディネスを調べて行なう必要がある。園によっては生れ月順に同じ二年保育でも年少組と年長組にかけて保育しているところもあるが、幼児保育にとっては望ましい方法であろう。

なお、幼児研究の一つとして、生れ月順にクラス編成して一年間保育した場合と、それを考慮しないでクラス編成して一年間保育した場合の保育効果の研究など興味ある問題である。幼児の社会性・興味・関心・性格・知能・体力などの発達の比較と指導する教師の

面からみた指導のしやすさなどの比較などが考えられる。

児童相談をしている事例の中で、幼稚園嫌いの子どもの中に、一人っ子、末っ子、おばあさん子などで溺愛・盲愛された非社会性児のほかに、早生れ児も多い。早生れのために、心身が未成熟で、運動しても、音楽リズムをしても、折り紙を折っても十分でできなく、焦慮にかられたり、敗北感をもつことが多く、遂に幼稚園を嫌う子もいる。(小学生にもいる) こうした点から考えて、早生れで身体的に未成熟な子どもの場合は、三年保育は好ましくない。団体生活ができるだけのレディネスができていない場合もある。特に、三年保育児志望者が少ないために二年保育児といっしょに保育指導することは、性格形成の上から考えて望ましくない。心身の発達が特に遅滞している早生れ児の場合は、二年保育よりも一年保育がよい場合もあるし、時には一年就学延期した方が、将来の心身の発達から考えて望ましい場合もある。

なおまた、生れ月順にクラス編成する場合、年長児組より年少児組の人数を若干少なくし、保育効果が上るようにするのも一考案である。いずれにしても、早生れの問題は、中学校よりも小学校、小学校よりも年少の幼稚園での指導に考慮すべき問題であり、研究すべき問題でもある。

(田中教育研究所)

(お願い 早生れ児について研究資料おもちの方は筆者までご一報いただければ幸甚に存じます)